

ナショナリズム理念の動向

嘉 野 優

一般にいわれるように、ナショナリズムの発生の基盤は歴史的な一定の段階、即ち西欧における絶対王制の確立とブルジョアジエの勃興の時代に準備されるが、その具体的な発現としてフランス大革命を指導した理念なり当時の国民の動きが一つの原型とされている。しかしそのこの西欧ナショナリズムの発展は歴史的に非常に複雑な道を辿っていく。とりわけ一九世紀後半社会主義理論としてのマルクス主義が確立すると、これが当時の民族理論なり運動に深刻な影響を及ぼし、その後の世界的状況の推移と相まってナショナリズムは複雑な自己運動を展開していく。こうした西欧ナショナリズムがいかなる形でアジア、アフリカナショナリズムを触発しこれに関係してくるのであるか。又近代以後アジア、アフリカのおかれた歴史的状況がそのナショナリズムの中心思想にいかなる独自の様相を与えていったか。特に後進地域の民衆運動に対して社会主義の民族理論は大きな魅力であり刺戟となつたことは否めないものであつて、それがこの地域のナショナリズムにどのように屈折してくるのであるか。この小論の取り扱おう

とする大体のメドはこのような点にかゝつてゐる。凡そ民族の問題なり民族運動は歴史的現実の具体的な面に関連してくるから、その理解もこれらの発展の中で動的につかまねばならぬ。それ丈にナショナリズムの運動でなく、その中心思想なり理念も歴史の中で分化発展していくものであることは云うまでもなからう。

一

周知の通りフランス革命は、その当初においては人道主義的精神の下に近代的自由や平等を旗じるしとして出発する。ところがこれに続くナポレオン戦争の時代はフランス資本主義の確立拡充の時代でもあり、当初の諸民族諸国民の自由・平等を原理としたナショナリズムは、ブルジョアジーによつて自由や平等と両立しない方向、即ち他国民を犠牲にしてのフランス国民の発展という方向に転換される。これに對抗して、他のヨーロッパ諸民族の民族意識が国家の防衛・抵抗という形で昂揚して現はれる。それが成功してナポレオンの支配を打倒すると、あとの收拾策のために

もたれたウィーン会議で生じた国際秩序は、逆に絶対主義的な旧体制の強化をとることになる。他方この時期すでに東ヨーロッパなど後進諸地域では国際的従属が深まりつゝあつたから、そこでナショナリズムの問題は不充分ながら民族解放の動きを示していたと思われる。こうみてくると、当時のナショナリズムは時期や地域など多少のズレはあるにしても、ハーツが一九世紀の自由主義や民主主義や民族運動などが緊密に絡みあつていたと指摘している如く、⁽¹⁾ 既に当時のナショナリズムにブルジョアの自由平等や国家の防衛、絶対主義への思慕、或いは又民族的解放、自立などの思想が微妙に絡みあつていたと云えるだろう。(ナショナリズムの語義のアイマイさは、その訳語としての「国家主義」「国民主義」「民族主義」などの上にも現われているが、このことは偶然でなく充分歴史的な背景をもっているからでもある)

しかし一九世紀も後半になると西欧ナショナリズムの理念に主導的なはつきりした二つの方向或いは性格が現われてくる。しかもその方向、性格は互いに相対立するものであつた。初期のナショナリズムよりも深刻な様相を呈してくる。云うまでもなくそれは一方においては西欧植民地主義の発展と帝国主義の確立を軸とし、他方では民族と民族問題に関する社会主義理論を軸として起る。これを理念的にみれば前者がブルジョアジーに指導された「国民国家」の立場にたつ漸進的社会改良による国内統一と対外的自己拡充であるとすれば、後者はこれを「ブルジョア民族主義」として拒否して対内的には「階級」の立場、対外的には「インタ

「ナショナル」(international)の立場からする民族問題の解決と処理を打ちだしてき、それらは又更に相互間の反撓と共に何らかの影響をひきおこしていつた。例えば前者はその反動としてます／＼隣国敵視などの反インターナショナル化の方向を強化すると共に、他面では労働者階級を中心とする国内民衆の要求に対して慎重に対処せざるを得なくなる。社会主義と民族主義との関係のはじまりは一九世紀の半ば頃(一八四八―共産党宣言)からであるが、それ以後第一次世界大戦勃発までに至る時期は帝国主義と植民地問題の登場及び社会主義理論の確立を軸としつゝ、ナショナリズム理念が当然の成りゆきとして次第に偏狭化してゆき且つ巧妙になつていく時期である。

元来ナショナリズムは情緒的、意志的なものを内容とするネーション意識(national consciousness)を土台にしており、とくに意志的側面はナショナリズムを生みだす欲求(national aspirations)として基礎的なものであろう。ハーツはこの欲求を次の如き四つの要素、即ち――一、政治的、社会的、宗教的、文化的な方面での国民的統一への志向 二、国外からの支配や干渉からの独立を内容とする自由と、国内の反国民的な諸勢力からの自由への志向。三、国民的な独自性や特殊性への志向 四、他に対する自国民の優越、名譽、権威への志向。従つてそこから起ってくる他国民を支配せんとする欲求に要素的に分けているが、特に最後の他に対する自己のネーションの優越支配の欲求はこれらの中で最も強くかつそれらの基礎をなすものであらうと云つてゐる。⁽²⁾ ネーション意識は、これを集団意識(group consciousness-

ness)の面からみれば程度の差はあれ自然的かつ一般的なものであるが、しかしそれが一定の思惟構造と運動をもつナショナルリズムとして現はれるには少くとも次の二つの条件はもたねばならぬであろう。一つは政治経済的或いは文化的な面におけるネーション間の矛盾の絡みあいの進展という歴史的客観的な側面と、二つはこれに伴って現はれるネーション内部の指導体制の側面である。これをこの時期に就てみれば帝国主義と弱小民族内至は植民地従属民族の問題があり、これらの問題に対処するネーション内部の指導体制は云うまでもなく支配的或いは指導的階級層のイデオロギーによつて左右される。しかも他方では未だ各ネーションの民衆の中に深く滲透していなかつたとは云え、これに真向から反対する社会主義の民族理論が既に確立しておるだけに、そのイデオロギーは一層巧妙とならざるを得ない。これらの場合に動員され利用されたものはネーション内部の民衆に横はる前述の如き素朴なネーション意識であつた。この点を西欧先進諸国に例をとれば、ナポレオン三世時代のボナパルティズムであり、又世紀末に諸国を風靡したショーヴィニズムなどである。それは経済的政治的な国内問題の困難と危機を国外に転換するためにも必要であつたであろう。ところが、こうした素朴なネーション意識のほかに他方ではネーション内部に目覚めてくる労働者階級を中心とした民衆の政治的経済な彼らの地位に対する自覚とその現状打破の動きが起てくる。これらの動きに対しては名目だけの「祖国の栄光」や諸外国からの自由、だけでは済まされなくなり、彼らの経済的政治的状态に対する何らかの実質的、利益にも配慮することが

支配階級にとつて必要となつてくるのである。当時これに対応するものが先進諸国における民主主義的な社会改良主義であつた。即ち、労働階級に対しては彼らに政治的参加の道を用意し、或いは社会立法等によつて生活上の希望を与えねばならなくなる。

このことはブルジョアジーにとつては明らかに譲歩ではあつたが、しかし実は又こうした譲歩をなす余裕がこれらの資本主義國家にできてきたことは見逃せない。すなわち所謂「帝国主義の落穂拾い」という植民地本国労働階級のその均てんである。歴史的には例えば植民地イギリスにおける選挙権獲得などを契機とする広汎な社会改良の諸政策がみられるし、ドイツではビスマルク時代後半の帝国主義的進出政策と国内における大巾な社会立法政策が同時に進展する。だからこの場合の国家的利益は植民地民族の搾取を土台にして、ある程度資本家階級、労働者階級を超えた共通の利益となり得たし労働者階級の意識構造にもナショナルイズム(nationalism)が進展して、革命的変革よりは社会改良主義的改革により大きな希望をつないでいくようになる。こうして植民地民族からの収奪は本国における労働者階級の利益に役立つ限りにおいて、国内の階級対立を緩和させる一要因として作用したと云えるし、「階級の論理」はまだブルジョアジーに指導された「民族の論理」の下に従属しておつたのである。

以上が一九世紀後半から第一次世界大戦前夜までの西欧ナショナルリズムの中心性格であつたと思はれる。要するにそれは資本主義的自由の土壌の上での帝国主義的政策とその国際的角逐、国内的には民主主義と社会改良主義とがブルジョアジーの支配のもと

に展開されることによつて生じたものである。ところが同時にこの時期は、他方では先進国の帝国主義的植民地侵略に対する現地住民の民族的抵抗運動の起ってくる時期でもあつたのである。それは植民地本国の側では悉くが「反乱」として受けとられたのでも知られる通りに、未だ充分組織的でなく突発的であり、従つてその殆どが失敗の歴史であつた。中国の義和團事件、フィリピン独立戦争、ブーア戦争凡て然りである。それにしても、こゝでは民族運動が外部に対する民衆の「抵抗」「反抗」運動として現はれてくることは当然とは云え注目せねばならない。近代ナショナリズム発生の地が西欧の独立国であり、植民地本国であつたのに對して、アジア、アフリカ等植民地従属地域のナショナリズムは非独立国で起り植民地で起つたのである。そのナショナリズムは搾取圧迫に対する現住民の自然発生的なエネルギーを土台にしたものであつた。そしてその土台の上に植民地出身のエリート達によつて西欧ナショナリズムの中から学び取られた思想が同胞民衆の間に持ちこまれてくる。持ちこまれたその思想は主として西欧ナショナリズム思想のうちの近代的自由、独立と社会改良的側面であつたと云えよう。これらのエリート達は先進諸国の近代的発展を直接間接に見聞し、顧みて自国及び同胞の惨めな状態におもひ至るとき、ヒュ머니ステイクな情熱を燃やして遅れた国内体制の改善と近代的自由の確立を真先に望んだのである。だから民衆と指導者の間には当初運動の過程で或種の不調が存在する。前者では白色人種の圧迫に対する自然発生的なエネルギーの爆発は反人種、そして客觀的には反帝国主義の抵抗形態をとるのに対し

て、後者では遅れた国内体制の改善克服（反封建）のかたちをとる。義和團のスローガンが知られるように「扶清滅洋」であつたのにたいして、孫文のそれが「滅滿興漢」であつたのなどその側であろう。いづれにしても植民地従属地域のナショナリズムの運動思想は西欧ナショナリズムと違つた独自の様相を呈してくる。つまりその性格に或種の質的变化が起つたのである。

恰も西欧及び植民地がこういう情勢にあつたとき、先にふれたように民族に関する社会主義の理論が確立する。社会主義の側ではこの時代を帝国主義の時代と規定し、ナショナリズム（実は當時の西欧ナショナリズム）をブルジョアナショナリズムとして否定し去る。そしてこれに代つて民族及び民族問題の理解と解決に関する社会主義の立場を提示する。スターリンの「マルクス主義と民族問題」（一九一三年）はこうした時期を背景にしている。彼はこの論文で民族（ナツィヤ）という基礎的集團の諸特徴を検討した上で、「民族とは、言語、地域、経済生活および文化の共通性のうちにあらはれる心理状態、の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された人々の堅固な共同体である」⁽⁸⁾という概念規定を社会主義の理論の中に与えると共に、この時代の内外の民族運動に対して包括的な説明を行っている。けれども民族及び民族問題に就ての社会主義の側からの力は未だ弱体であつて、第一次大戦前夜の様相に抗することは出来なかつた。強國間の経済的、政治的角逐はいよゝ急迫し、又強國とその植民地及び弱小民族間の亀裂も次第に深まりながら第一次世界大戦に突入するのである。

(1) F. Hertz: Nationality in History and Politics

P. 262-68

(2) ibid. P. 21

(3) スターリン「マルクス主義と民族問題」全集第二卷三

二九頁 大月書店

二

第一次大戦後になると民族の諸問題は、一九世紀後半に社会主義が確立してゆく頃に見られたよりもつと切迫した現実上の問題として、かつより大衆的な広がりをもつて逼ってくる。こうした様相の根底をなしたものは一言でいえば一つは各民族民族の民衆の社会的自覚と意識の昂まり及び戦争のもたらした民衆の生活窮迫化と不安ということであり、二つはロシア革命の成功、社会主義国家の成立という事態である。

第一の点に就て云えば、戦勝国戦敗国をとはず或いは帝国主義国たると植民地従属国たるをとはず戦争そのものが各国民衆の自覚と社会的意識を高めたことは当然である。ヴェルサイユ体制での所謂民族自決の原則も各国民衆のこうした面の高まりと無関係であり得ない。このように意識構造の面で訓練され経験をへた民衆を、「民族」の面からいかに組織するかということは国内問題として、国際問題としても政治的に重大となつてき一層大衆的な運動の形をとるに至る。そしてその大衆的な運動形態は革命や反動の側から、或いは戦争や平和の側からの政治的指導と次第に結びつけられていく。これが民衆の生活窮乏化を背景にして進行し

ていったのである。このことをヨーロッパ帝国主義国に就てみると、戦争の痛手とその影響は戦争参加国全体にわたつて深刻となり、国民の生活困窮は民衆の不満を増大させ、経済恐慌とそれに伴う失業問題は悪質化してゆく。殊にヴェルサイユ体制を押しつけられたドイツの情勢は混乱を極めるが、その混乱の中からヴェルサイユ体制打破などをスローガンにした独特の民族観をひきつけて反動体制ファシズムが登場し、心のよりどころを失つた階層の人々を巧みにとらえ乍らこれを組織化し、戦勝国イタリーやがては日本の反動体制などと大きく結びつけられていく。これに対抗する動きとしては社会主義の国際的勢力を背景にし労働階級を中核とした「人民戦線」の結成であつて、動と反動は大衆的な規模で対立してゆくが、帝国主義の一形態たるファシズムは排外的神話的な独特の「民族」観をそのイデオロギーにとりいれることにより巧みにその正体をカムフラージュしつゝ「階級」と「インターナショナル」の立場に立つ勢力を圧倒していったのである。

西欧以外の地域をみると例えば東欧やバルカンでは民族自決の民族自決主義は実際には反社会主義、反ソヴィエトの楯として或いは列強の勢力圏設定の便宜に供されてその実を失つてしまふ。こうしてこれら諸民族の動きは大体において帝国主義の側に牛耳られて根本的な民族問題の処理は放棄された形となつた。これら以外の従属地域での民族問題に至っては殆どヴェルサイユ体制の問題となり得ず、旧態依然として帝国主義列強の拘束の中におき放しにされる。例えばインド、中国、朝鮮などの民族的要求は

これら列強から無視或いに弾圧されてしまう。それ丈にこれらの地域では欧米列強の力に頼らずに自力で以て民族的圧迫をはねのけようとする大衆的な運動がその後起てくるわけであつて、帝國主義的民族政策への根強い不満が更に培はれる。その際理論の面でも心理面でも大きな刺激となつてくるのがソヴィエト社会主義國家の誕生とその民族問題処理の方策であつた。

第二の点、即ちロシア十月革命の成功と社会主義國家の成立といふことは世界的にみて劃期的な事件であるだけでなく、民族の問題に關しても決定的な意義をもつておりその後の民族運動は凡て何らかの形でその影響をうける。特に植民地從屬地域のナシヨナリズムにおいて然りである。というのは大戰の勃發に際してはこれら諸地域の民衆並びにその指導者はその民族的地位の改善に希望をいだいて帝國主義戰爭に参加協力したのであるけれども、前述の通り戰爭終了後それが殆ど單なる幻想にすぎなかつたことを身を以て知ると共に、帝國主義政策からの解放は与えられないのでなしに自らの力で勝ち取らねばならないということを学んだのである。その際資本主義に敵對する社会主義國家の誕生とその民族理論が彼らにとつて大きな魅力となつたことは蓋し當然であらう。スターリンは十月革命の一週年目（九一八一）にあたつて、十月革命の世界的意義特に被壓迫從屬民族の問題に關するその意義について次の諸点をあげている。即ち十月革命は「(一)、民族問題のわくをひろげ、これをヨーロッパにおける民族的抑壓にたいする斗争という部分的な問題から、被壓迫諸民族と植民地、半植民地の帝國主義からの解放という全般的な問題に転化し

たこと。(二)、西欧と東洋の被壓迫民族を帝國主義という共通の軌道にのせて、彼らの解放のための広範な可能性と現実的な道をひらき、それによつて彼らの解放事業をいちじるしく容易にしたこと。(三)、まさにこのことによつて社会主義的西欧と奴隸的東洋とのあいだに橋をかけ、世界帝國主義にたいする西欧のプロレタリアからロシア革命をへて、東洋の被壓迫民族にいたる新しい革命戦線をうちたてたこと」である。(1) こうして民族問題のわくは広げられて西洋と東洋を覆うにいたつて世界的全般的問題になると共に、アジア、アフリカ地域の植民地從屬地域の民族解放事業は世界帝國主義にたいする革命戦線の一環として共通の軌道にのせられる。

社会主義の民族問題に及ぼした影響を更に摘記すれば、(一)社会主義國家の存在そのものもつ影響力である。嘗ては社会主義は單に理論上の問題にすぎず、從てインテリゲンチヤや労働階級の一部に滲透したのであつたが、それが今や反資本主義の國家として現実に國際政治の舞台に存在するようになったのである。社会主義國家の誕生そのものが資本主義國家の支配階級にとつて非常にショッキングな事件であり、これに大きな危険と脅威を感じたことは當時の干涉戰爭やその後の包圍網の中に具体的にあらわれているが、このことは裏からみれば資本主義國家の民衆への大きな影響力を示すものである。とりわけ植民地從屬地域のナシヨナリズムにとつては、少くとも反帝國主義という面においての共通の味方をはじめて獨立國家としての社会主義國家に見出したといふことになる。(二)社会主義はその理論の面で民族問題に大きく

影響する。周知の通りマルクス以来社会主義は民族及び民族問題に関心を払い、民族問題についてのその立場の解決方策を論じてきたし、レーニンの民族問題の重視とその理論的展開、それを受けてのスターリンの集大成と精密化というふうに社会主義国家の成立以後も一貫して取り扱ってきており、これらが特に植民地従属地域の民衆運動とその指導者にとつて大きな支えとなつたことは明らかである。そしてこの理論的な面は当時の社会主義の国際的組織を通して各民族の内部にもちこまれ労働者階級の中で消化されていく。

けれども第一次大戦後のこの時期を国際的にしめくくるものは排外侵略的、神話的「民族」観念などで扮飾されたファシズムの嵐であつた。ナシヨナリズムは偏狭独善のナシヨナリズムとなつて完全にファシズムのとりことなつたのである。ファシズムは「第一次大戦後の独占資本主義の深まりゆく不安と苦悩、および国際的資本主義関係の不安定、おびただしい階級脱落分子の存在、都市小ブルジョアジーおよびインテリゲンチヤの広範な層の窮乏化、農村小ブルジョアジーの間の不満。そして最後にプロレタリア大衆行動のたえまない脅威」⁽⁹⁾などの社会的経済的条件の下に帝国主義的反動攻勢が大衆動員に成功することによつて具体化したものであつた。しかしその最大のねらいが資本主義の危機の下で着実に粘りつよくのびてくる労働者階級の力に対して、これを圧殺するためのものであつたと云える。而もそこでは労働者階級のみならず、一切の人民の基本的権利が次々に廃止され、これを守るための凡ての制度と民主主義が破棄され、完全な歴史の

逆転と仮借なき人間無視が実行されたのである。こうして第二次世界大戦にはいつていく。第二次大戦は一般にファシズム対デモクラシーの戦争であるといはれる。この二つの概念の検討はともかくとして、ナシヨナリズムに関する限り独善偏狭な侵略的ナシヨナリズムをファシズムが包含していたことは云うまでもない。他方こゝでいうデモクラシーも欧米的な所謂近代デモクラシーのみをさすのではなく、社会主義的デモクラシーを含めた限りでのそれであつて、この限りにおいてこの大戦はファシズム対デモクラシーの戦争であつたのである。この意味において第二次大戦はナシヨナリズムの来るべき方向に対して何かを暗示していると云えるのでないか。

第二次大戦の戦争要因としては資本主義強国間の深刻な国際的対立が第一にあげられねばならない。これは第一次世界大戦の場合と殆ど同じであるが、第二次大戦の歴史的品格を第一次大戦のそれとはつきり区別するものの一つは正式交戦国としてソヴィエト同盟という反資本主義国家が参加していることであり、さらにもう一つは交戦若しくは被占領各国の内部の民衆や従属地域の諸民族の間で統一的な形ではなかつたにしろ夫々の交戦政府とは独立に行はれたゲリラ的抵抗運動であつて、これも特徴的である。これら二つの特徴面から云えることは、第二次大戦は第一次大戦の場合のように専ら帝国主義的対立だけでなく、反帝国主義的戦争勢力の要素が連合国勢力の中に含まつていたことである。つまり連合国の勝利はこうした公然たる又は隠然たる反帝国主義的な要素が加はり、これが欧米的な「自由国家」とデモクラシーの防

衝という一点において固く結び、ファシズムと対決したことによつてのみ可能であつたわけである。それは所謂「二つのデモクラシー」のファシズムを前にしての結婚であつた。勿論連合国側のこうした矛盾面は戦争遂行中にも露呈するし、とくに戦争終了後の国際情勢を制約するに至り戦後の諸問題として持越されたことは周知の通りである。けれどもこゝで忘れてならない点はファシズムと第二次大戦という切実な共同体験を通して「資本主義自由国家」と「社会主義国家」の間に共通の紐帯がつくり出されたことである。この両者を結びつけたところの共通の理念はファシズムの仮借なき人間無視にたいする人間性（ヒューマニティ）の回復であつたということが出来よう。それは人間の尊重の叫びであり、従つて又人間らしい生活への要求と結びついてくる。個人の政治経済的自由の保障をとくに強調する欧米の近代デモクラシーと、被圧階級と被圧地域住民の解放を強調する社会主義的デモクラシーは、ともにファシズムの嵐をくぐることを通して鍛えられたと云えよう。デモクラシーを歴史的に発展する動態的概念とみ、人類の高上への努力をたえずかきたてゝくれる現実的理念であるとすれば、そして第二次大戦が「二つのデモクラシー」の勝利に終つたとすれば、それは第二次大戦後のナショナリズムの理念に反映しないではおかなかつたであらう。

(1) スターリン「十月革命と民族問題」全集第四巻 一九一頁

大月書店

(2) R. Palm Dutt : Fascism and Social Revolution

岡田訳「ファシズム論」 一三七頁 理論社

三

第二次世界大戦は世界史をこれまでの欧米中心の歴史から、米ソ二大勢力を中心とする歴史へと移行させたと共に、アジア、アフリカを世界史の舞台に解放させたといえる。大戦後の一般情勢として、社会主義圏の確立拡大や米ソ二大勢力の対立などがあげられるだろうが、ナショナリズムの動向という点からみて重要なものは、戦中戦後を通じてのアジア、アフリカの動きである。ナショナリズムの運動と思想は、すでにみたように第一次大戦前後以来ヨーロッパ及びその周辺地域からアジアおよびアフリカの諸地域へと脈々と波及していきつゝあつたが、第二次大戦を転換点としてそれは最高調に達したといえる。第一次大戦の戦後処理でも前述の通りおき去りにされてしまつた植民地従属地域が今や現代ナショナリズムの中心地域となつたのである。

アジア、アフリカなどの植民地従属地域のナショナリズムが急激におこつてくる戦中戦後の直接的原因として具島氏は次のような点をあげている。即ち第二次世界大戦はアジア、アフリカの一部の植民地、半植民地を直接戦場の中に巻きこんだ。そういうところでは灌漑施設や港湾、工場等は破壊され、生産は表しく低下したけれどもこの混乱の中で西欧、アメリカ或いは日本の植民地支配体制も同時に破壊されてしまい、民族解放運動に対するブレーキが取り除かれたこと。直接戦場にならなかつたか、なつてもその被害の比較的少かつた地域（インド、中東、アフリカ）では戦事中に工鉱業が発展し、原料生産の拡大が行はれた。これは当

然民族ブルジョアジーの成長を促すと共にプロレタリアートの増大をもたらした。またこれらの地域で道路、飛行場その他の軍事建設が活潑に行はれたこともプロレタリアートの増大に拍車をかけたのであつて、これらの事態が西欧植民地主義の弱体化と相まつて中東やアフリカ地域において民族解放運動を活潑化させる原因になつたという。⁽¹⁾

戦後の植民地ナショナリズムの解放運動には、以上のような植民地領有国の戦争敗北や弱体化とそれに伴つた植民地民族の主体的条件の確立という事情が存在するが、それらの事情の国際的背景としてのソ連を中心とする社会主義圏の確立拡大という事実も無視できない。十月革命以来孤立無援の国際的包囲網の中に閉じこめられた社会主義国家は大戦によつて東欧からアジアにまたがる強固な社会主義体制を築きあげ、戦後の米国を中心とする資本主義体制とともに国際的・二大勢力を形成するに至つた。更に国家単位別にみるとソ連および中国が戦後の国際機構たる国際連合の五大国の中に加はるに至つたことは、第一次大戦後の国際連盟が専ら欧米中心のものであり植民地民族の意向利益を完全に無視したのと較べて、その意味するところは大きい。そこに歴史の進展を感ずることもできる。しかし乍らアジア、ナショナリズムにとつて直接大きな意義をもつのは中華人民共和国の成立であらう。なぜであるか。中国は同じアジアの一員として列強の植民地主義の下に呻吟してきたが、これを自力で以て解決することができた。中国革命は一九世紀半ばの太平天国の乱（一八五〇）以来の所謂旧民主主義革命をへて、五・四運動（一九一九）以来の所謂

新民主主義革命を完成し、更に社会主義への新しい革命の展望を含む全過程であつて、それ自体が一九世紀後半から二〇世紀前半にかけての世界史的意義をもつものであるが、この全過程そのものが中華人民共和国成立の過程を形成している。それは民主主義革命と民族独立運動および社会主義革命の關係の苦難の歴史である。かつて十月革命が主として當時の従属諸地域の民族指導者に感化を与えたとするならば、その苦難と不幸の半世紀を踏みこえ自力でこれを解決した新中国の成立は、寧ろ従属地域の民衆に直接の影響をもつ性質のものであつたと云えるだらう。更にもう一つは、六億の人口をしめる新らしい統一国家が社会主義圏の中に重要構成分子として入つたことは国際政治のバランスの上で大きな変動を与えたことは云うまでもないとして、国際機構上は未解決にしても現実に大国の一つとしてその国際的地位を確立したことである。これをアジアの犠牲において寧ろその国際的地位を確立した嘗ての日本と較べるとき、この国の占める位置は日本のそれ以上にアジア諸地域の今後の動向に影響をもつであろうと思われる。

最後に第二次大戦以来のナショナリズムの主流となつたアジア・アフリカナショナリズムの一般的性格や若干の問題点について考えてみる。M・ポールはアジアのナショナリズムの性格を植民地ナショナリズムと規定して、その特質を(1)帝国主義への反抗(2)社会的経済的立ち遅れ内至貧困への反抗(3)西洋(人種)への反抗にわけて、これらの化合物がその独特の性格をつくりだしているという。⁽²⁾ 植民地主義、帝国主義への反抗という点はアジア、アフリ

カナシヨナリズムの中心をなすものである。それはこれら殆ど凡ての地域民族が西欧植民地主義の政策の手段として過去三世紀の間、植民地半植民地或いは保護国又は属領として支配搾取されてきた共通の事実起因するものである。彼のいう西洋への反抗という面もこういう暗い過去からくる半ば衝動的なものであろう。そして今日では、これら地域の反植民地主義は国際連合の機構の上でも国際的勢力を形づくるに至っている。勿論所謂アジア・アフリカグループにしても、国内事情やこれまでのいきさつからしてその立場は必ずしも同じでなく、従て反植民地主義の色合いもちがつてくるが反植民地主義的性格をもっているという点では共通している。このほかに国連内の九ヶ国からなるソヴィエト、ブロックがこの勢力の一部を形成してこれに強力な支援を与えていることは云うまでもない。しかし乍ら戦後解放をかちとつた国家群や解放斗争をつづけている諸地域と、社会主義国家群との反植民地主義という面での一致提携はM・ボールのいうところの「社会的経済的貧困への反抗」という面になると微妙になつてくる。というのはこの点はこれらの国々の国内建設、国内問題の処理という難かしい問題に結びついてくるからである。つまり「民族の論理」の次元以外の「階級の論理」をこの問題は含んでいるからである。一般に従属地域のナシヨナリズムの解放運動はその過程において政治的独立の要求と人種的反抗を様々の形で結びつけて進行する。その際同時にその地域の民衆の社会的、経済的解放への要求も起ってくる。経済的解放への要求は所謂アジアの貧困、即ちこれらの地域の封建的土地所有制、低い農業生産力、

膨大な過剰人口の堆積など社会的物質的条件を反映するものではあるが、しかし解放運動の過程においてこうした階級的な関連の面を専ら強調することは民族的な面における統一の破綻となる可能性もでてくるし、地域によつては階級関係が混沌としてまだはつきりしないところもあるだろう。けれどもこれらの地域の、遅れた社会構造や経済的貧困の問題の解決ということは、それがいかに困難であるとしても、後でのべるように蓋し現代ナシヨナリズムの根幹にかゝわつてくる問題でもあるので、これを完全に抜きにしてはナシヨナリズムの民族解放や独立の運動は中途半端なものとして終るであらう。そのてんで後進地域の民族運動においてこれらの内部問題をも含めての処理に対して一つの方向的事例を示唆しているのが、先にあげた中国の民族革命運動であると云える。というのはこれらの諸地域での民族運動は反帝国主義とともに内部の封建的諸制度や社会関係、つまり前近代的なものに対しておそかれ早かれ対決しなければならぬということである。そこに実際問題として相当期間にわたる困難な課題をかゝえているわけである。

次に注目すべき点は、これらの地域のナシヨナリズム運動が地域や国家や民族の違いを越えて団結、協力の形態をとりつゝあることである。このてんは従来の西欧的ナシヨナリズムとは趣きを異にしている面といつてよい。こうしたナシヨナリズム運動における連帯性の傾向、ナシヨナリズム運動における謂はばインターナシヨナル(international)な性格の現われは、緩慢ながらこれまでのナシヨナリズム理念に新しい要素を附与し、ひいてはナシ

ヨナリズム運動、理念そのものゝ将来の展望に關係するものではないかと考えられる。というのはナシヨナリズム固有の性格たる「自民族、自国家の立場」に立つただけでなく同時にこの立場を包括しながら止揚せんとする芽ばえを、そこにみるからである。それはともかく、こういう傾向なり性格はどこからでてきたものであらうか。差し当て重要な理由の一つは共通の課題と条件をこれらのネーションが担つてゐるということである。皆それぞれ異つた国家的、民族的又は歴史的背景と条件をもつてゐるとは云え、一方ナシヨナリズム運動という面からみると、これらの諸地域は大筋において共通な条件下に長い間おかれてきたし、又現在おかれてゐる。そこに又歴史的運命の共同性の意識が生じてもくる。これが彼らを、他の凡ゆる相違を踏まえて結びつけてゐる大きな原因であらう。しかしそれとは別に社会主義理念の影響をも考えることが出来はしないか。これらの地域や国々の民族的指導者の殆んどは社会主義の信奉者ではないし、又その同調者でもないかも知れない。彼らは内部の社会主義に対して弾圧さえするだらう。しかし乍ら民族解放の方法論において彼らは社会主義の理論に多かれ少かれ触れその影響をうけていることは明らかである。又民族指導者だけの問題でなしにこれらの地域に輩出した社会主義運動者の実践面での努力も忘れてならないことである。とはいへナシヨナリズム運動における連帯性やインターナショナルな性格は、イデオロギー面やその他個々の点から理解するよりは寧ろナシヨナリズム運動やその理念の歴史的社会的推展というパースペクティブから総合的に把えていくべき性質のものであらう。

第三に、運動形態の面からその特徴をみると、夫々の地域の比較的広範な民衆をとらえていて、而も多小とも組織的な民衆運動というかたちをとりつゝある点は見逃せない。一昔前までは運動の主導的役割を荷つていたのは中産階級や知識階層の出身者で占められていたと云えるが、既にみた通りこれらの地域でのプロレタリアートの増大や民衆の社会的自覚などはナシヨナリズム運動をして民衆を基盤にしたものたらしめていつたのである。これらの民衆は社会構造の広大な底辺部を形成してゐる貧困民衆であることは云うまでもない。ところで民衆を基礎にする運動にあつては民衆と指導者との關係、指導者の性格といったことなどが当然問題となつてくるだらう。これは重要な問題であるが、こゝでは深く検討する余裕がない。唯指導者のパースナルな資質の面について一言する。アメリカのコールマン (James Coleman) はアフリカのナシヨナリズム指導者を「カリスマおよび宗教的シンボリズムをもつ」ものと「強力にして有能ではあるが非カリスマ的」な二つの型にわけが、特にこのカリスマ的指導の役割をアプター (David E. Apter) は問題にして、M・ウェーバーの所謂「伝統的支配」から「合理的支配」への質的転換を媒介するものとして、これに一定の歴史的意義を認めると共にその過渡的な性格を指摘しているという。⁽³⁾ カリスマ的支配の非持続性や不安定性に就ては云はれることであるがそれはともかく、植民地ナシヨナリズムの原動力は前述の通り或る程度組織化された民衆運動にあるのであつて、仮りにカリスマ的性格の指導者が存在するにしても、それは民衆運動の過程において民衆によつて求められつく

り出されるものであり、その逆ではない。けれども古い価値や体制を破つて新しい価値や体制をつくりだそうとする、若しくはそうしたものを外から自分達の内部に導入しようとする民衆運動にあつては、少くともその比較的初期の段階にあつては、これらの民衆にとつて彼らの指導者のパースナルな資質なり性格なりは重要な意味をもつてくるものである。総じて現代ナショナリズムの指導者に共通したパースナリティの型として云い上げる点は、彼らが一樣に各自の民族の歴史的、伝統的な土壌をしつかり身につけておるということであらう。民族のもつ特殊性や民族内部の独自の諸課題を重視しそれらを踏まえながら、新しい価値や社会的体系の創出なり導入なりを志向しているという点であらうと思う。毛沢東がその「民族戦争における中国共産党の地位」(一九三八)という論文の中で「われわれの歴史の遺産をまなび、マルクス主義的方法によつてこれを批判的にしめくくることは、われわれの学習の他の一つの任務である。わが民族には数千年の歴史があり、その特徴があり、そのいくたの貴重な宝をもっている。これらのことについては、われわれはまだ小学生である。今日の中国は歴史上の中国が發展したものである。われわれはマルクス主義的歴史主義者である。われわれは歴史を切断すべきでない。孔子から孫中山にいたるまでのものにしめくくりをつけ、この貴重な遺産を継承すべきである」⁽⁴⁾といつてゐるなどはそのほんの一例であらう。

偕てしまいに現代ナショナリズムの一般性格をその中心理念の面から考えてみよう。近代ナショナリズムの発生源は西欧の独立

諸国であり、又植民地領有国であつたのに対して、現代ナショナリズムの主流たるアジア、アフリカのその発生地盤が非独立国であり植民地であるということ、したがつてそこからこれら二つのナショナリズムの性格には或種の質的变化が当然考えられてくるということについては先にのべた。そして人種的差別や帝国主義的搾取や非人道的圧迫のもとにある貧困民衆の中に、ナショナリズムの運動と思想がもちこまれるとき、その様相が反抗と抵抗の精神でもつて貫かれるようになることは必然的な成り行きであらうという事についても若干ふれてきた通りである。ところでその際の反抗や抵抗は、主として、外から押しつけられた為に生じた劣悪な生活環境、生活条件を排除するための反抗や抵抗であり、反抗や抵抗そのものがいはば目的であつた。ところが彼らのあいだに環境や生活条件の惨めさに対する社会的自覚と認識が深まつてくると、抵抗は彼らが現におかれてゐる環境諸条件一般の克服という方向にまで拡大されていく。人間らしい生活への欲求が集団的な規模で湧いてくる。しかしこういう論理の筋道はともかくとして、こゝで指摘したいのは現代ナショナリズムの理念構造は、その中に現代という時代の背負う一つの思想をとり入れつつあり、又とり入れざるを得ないということである。その思想とは、これを人民の幸福追求への欲求やその権利といつてよく、或いは生活権の思想といつてもよいであらう。そしてこの思想は人権の思想をその支柱として含んでゐることは云うまでもない。つまり民族の独立や解放の思想と、人民の幸福追求の欲求、人間としての生活権の思想とがナショナリズムの理念の中で結びついて

くるのである。このてん、現代ナショナリズムは人権思想と革命精神とをその性格とするところのフランス大革命当初における、ヘイズ(C. H. Heyes)のいわゆる「ジャコバン・ナショナリズム」と相通ずる面をもつていると云えるかも知れない。

そのことは免もかく、所謂生活権の思想には周知の通り歴史的な背景があり、現代ナショナリズム理念における前述のごとき思想的要素もそれらの流れにそうものであることは云うまでもなからう。第一次大戦後、資本主義諸国は過剰な生産設備と縮小した消費能力との深い矛盾に直面し、国内的国際的に資本主義そのものが全体として行き詰りになった様相を示した。それは何よりもまづ膨大な失業者の氾濫という事実に具体的に示される。しかもその失業は慢性的構成的なものとして悪質化し、経済恐慌は世界的な規模で襲った。こういう事態からして大衆全般の生活窮乏の一般化とその深刻化の現象が進行し、大量失業と窮乏、その結果としての生活破綻、健康破壊が各国の国民生活の根底をゆすぶるに至る。各国民大衆をおおうこのような生活危機の一般化とその危機感の滲透を前にして、個人主義的ないし自由主義的責任原則に基づく資本制経済秩序に対するこれまでの信頼感そのものが根柢からゆすぶられてきたのである。社会保障という新しい理念にもとづく制度を資本制社会そのものが、その維持存続のためにも模索しはじめなければならなかつたゆえんである。社会保障の理念の制度化の問題は、むしろ第二次大戦後に持ちこされて、今日の重要課題の一つとなつていくが、この理念が民衆の福祉や生活の向上、人間らしい生活への欲求或いは生活権といった思想と深

い結びつきをもっていることは明らかである。

さてこのナショナリズム理念の新しい要素であるところの生活の向上建設、人間らしい生活への欲求或いは幸福追求という考えは、これらネーションの民族独立、経済建設或いは社会改造や近代化という現実のさし逼つた状況を基礎にしこれと直接結びついているのであつて、それらは観念的なものでなく、よりもつと実質的現実的な性質のものである。ところで、こうしたさし逼つた問題の処理解決のためには実際問題としてどうしても戦争より平和を必要とするであらう。平和の問題がそれ自体として今日ほどギリギリの現実的な重みをもつて、しかも人類的な規模で逼つてきている時代はないということは知られる通りであり、従てアジア、アフリカにおいても無論例外でない。それにしてもアジア、アフリカのナショナリズム運動においては、民族独立や民族の生活建設という立場を媒介にして平和の問題が把握されるという面は、岡倉氏が指摘するように特徴的な面である。この地域ではナショナリズムと平和擁護とが一体をなしていると、同氏はいう。⁽⁵⁾ もちろんこのことは平和における人類的、道義的な立場を排除するのではない。理性的であるよりはもつと情緒的な立場から、理想的であるよりはもつと現実にもとづいてものごとを把握しようとするいはばアジア的なアプローチの仕方からくるものでもあらう。

ところで平和の問題は、前述のとおり単にアジア、アフリカの諸ネーションの立場からだけでなくまさに現在および将来にわたる人類にとつての問題なのである。過去においてたしかに「民

族」は大小の戦争の原因であつたと云いうるが、そのことはより正確に言えばナショナリズムがこれに拍車をかけたということである。しかるにこんにちのナショナリズムは平和を保障する一要因として作用しはじめていると云えはしないか。国際社会の局面においてはそれは、云うまでもなく二つの体制の平和的共存の問題に関連してであつて、対立する二大勢力の間に介在する「第三」の立場としてそれは一つの緩衝的な役割或いはかけ橋の役割を客観的には負いつゝある。このようなかたちで現われている現代ナショナリズムの綱領・指針として具体的に表現されたものが一九五四年の所謂「平和五原則」であり、更に翌年のバンドン会議で採択された「平和十原則」である。二十九ヶ国の政府代表が参集したこのアジア、アフリカ会議は史上はじめて白人を交えないでもたれた両大陸にわたる有色人種だけの国際会議であつて、この会議の開催そのものがこれら地域のナショナリズムのインターナショナルな性格を端的に示しておるともいえよう。

以上アジア、アフリカの現代ナショナリズムの様相、特質を中心に最後にみたのであるが、しかしそこには現在又将来ともいろいろの矛盾なり困難な問題を数多く孕んでいることは断るまでもない。インドにおける宗教的、社会的対立として知られる諸問題。その代表的なものとしてのヒンズー教徒と回教徒との対立、或いはユダヤとアラブの宗教的、民族的な敵対関係などはその一例にすぎないだらう。又内部の階級的矛盾は国内建設の段階に入るほど表面化してくるであらう。更にこういう矛盾対立面は、過去の植民地支配の時代に分轄統治に利用されたが、今後も外部の

勢力によつてこれらの矛盾面が誘導激発もしくは利用される可能性は充分ある。というのはアジア、アフリカのナショナリズム運動はそれらの国だけの問題としてだけは処理しえず、さらにそれをとりまく国際的諸勢力の動きにも大きく依存しているからである。

この小論では社会主義理論における民族および民族問題のとり扱いかた、これに関連して民族と階級との関係、将来における民族の問題のもつ意義などについてもふれる予定であつたが、ひとまづこれで打切ることにした。

- (1) 具島兼三郎「現代の植民地主義」四二―四七頁
- (2) W. M. Ball ; nationalism and Communism in East Asia 大窪訳「アジアの民族主義と共産主義」一一二頁 岩波書店
- (3) 世界経済調査会編「ナショナリズムの研究」六四六頁以下 慶応通信
- (4) 毛沢東「民族戦争における中国共産党の地位」選集 四巻 三二―三三頁 三一書房
- (5) 岡倉古志郎「民族」一四七頁以下 光文社